

渋谷の古書店【Flying Books】さんに

取材に行ってきました！

Q1. 過去のインタビューにて、本の配架基準として「好きな本しか置いていない」*1と答えていましたが、その中でも目立つところに飾られている本はどのような基準で選んでいるのでしょうか。

*1 [ビート〜カウンターカルチャーのスピリットを日本に伝えていく使命。【Flying Books\(山路和広\)】\(2022/6/23 掲載\)](#)

A. 本は、私が好きなビート・ジェネレーション*2という 1950 年代のアメリカ文学の棚をお店から一番奥にして、ヒッピー、ドラッグ、60 年代の演劇の本などそこから派生していくような置き方をしています。そのため、特に目立たせたい本はあまりなくて、例えば、哲学が好きな人が隣の本棚を見たら、興味が広げられるように、ジャンルごとに分けて並べています。

アマゾンでもおすすめの本が出てきますが、せいぜい 60 冊がいいところですよ。でもフィジカルな棚だと、何百冊と周りに興味を広げられる出会いがあります。ネットは、元々自分の好きなものを探しに行くことはできるけど、好きになるものを探しに行くには、このようなフィジカルな本屋さんがいいと思ってお店を始めました。

*2 1940 年代終盤から 1960 年代のアメリカの文学運動で、それを主導した作家集団のこと。腐敗した産業社会や既存の価値観からの脱却を目指し、禅やジャズ・酒・薬物による陶酔によって、内なる自我を開放することを目指していた。参考:時代の異端者たち「ビート・ジェネレーション」とは? 幻冬舎ルネッサンス)

Q2. アートポスターが壁際に並べられているなど、お洒落な店内ですが、照明やインテリアなどのこだわりをぜひ教えてください。

A. こだわりは、友達を呼びたいような、自分の居心地の良い空間にしたいという思いがあり、木の床もそのほうが、気持ちが良いと思って作りました。外国のどこの街に行っても、自分が気に入ったカフェで、コーヒーを飲みながら本を開くとそこが自分の居場所になった、という経験がありました。その経験から、ジャズがかかっている、木の床で、コーヒーの香りがする空間でゆっくり本を読める場所を作りたいと考えていました。情報を得るのは、ネットの方が簡単だけど、やっぱり楽しさってそれだけではないと思います。だからコーヒーも1杯ずつ豆をひいてハンドドリップしています。そのほうが、香りも全く違います。このお店に来た際には、ぜひ五感で楽しんでいただきたいです。



Q3. 日頃どのようなお客様がよく来店されますか。年齢層や職業などをお伺いしたいです。

A. 元々50年前からやっている古本屋のビルで、古くから来てくれているお客さんも多いですし、この辺りはアート系の専門学校も多いので、10代から7、80代まで男女幅広いです。また、海外のお客さんも多くて、どうやってここ見つけたの?と聞くと、口コミで友達に勧められたと言っていました。有名なDiorのデザイナーの方や、夏フェスシーズンは結構ミュージシャンの方もいらっしゃいます。

Q4. 詩の朗読会や音楽のライブなど、書店を超えたイベントが行われていますが、イベントを企画するとき大切にしていることはありますか。

A. 古本のセクションと一緒に、今流行っているものというよりは、特に将来に残していきたいと思うもの、普遍的なものをやるようにしています。本屋さんなので、音楽のライブも開きますけど、例えば詩の朗読会など、「言葉」を大事にするようにしています。

Q5. なぜ何度か海外に本の買い付けに行ったのでしょうか。

A. 私が古本屋を始めた2002~3年は神保町などの老舗の古本屋で修行してから独立するというのが主流でした。しかし、すぐにお店を開きたいという気持ちがあり、自分で本の買い付けに行くことにしました。幸い、学生時代からバックパッカーとして海外の本屋さんによく行っていたので、海外の本さんの場所は知っていました。日本には無い本を買って並べることは、誰もやっていなかったもので、これで店を開けると思い、その後も何度か海外に買い付けに行っていました。

Q6. 買い付けでは何カ国くらい訪れましたか? 訪れた国など海外でのエピソードについて教えてください。

A. お店を始めた当初はアメリカでの買い付けが中心でしたが、今はフランス、イギリス、ベルギーにも行っています。アメリカへの買い付けの回数は30回くらいで、400日くらい過ごしているので、友達もできるし、たいした英語の勉強もしたことなかったのですが、英語も普通に話せるようになりました。どこの国に行こうが、すぐ同じ共通の本の話題で仲良くなれるので、今はドイツやオーストリアの仲が良い古本屋さんもあります。国境とか言語の垣根があまりないというのが本の面白いところですね。

今は古書フェアに行くと、全米とヨーロッパから200件以上のブースが出ていて、そこで世界の古本さんと会うことができます。例えば、サンフランシスコでやっている古書フェアで、再来週はニューヨークの古書フェアで会おうと話すこともあります。

Q7. 詩の価値や面白さはどのようなところにあるとお考えでしょうか。

A. 詩集はどこから読んでもいいし、一冊読み終わらなくてもいいし、そのときの気分に応じて適当なページを開けばいい、好きなタイミングで好きな量だけ読んでもいいところです。また、何回でも読める、読む時期やタイミングによって意味が変わるといった点も魅力だと思います。

好きなサンフランシスコの本屋さんが安い値段のポケット詩集を出していて、私もやってみたいと思い、ポケット詩集の出版を始めました。コーヒー1杯分の値段で何回も読み返せるような素敵な言葉と出会えたらいいなと思っています。ぼろぼろになってももう一回買えばいいやくらいの気軽さで言葉を連れ歩いて欲しいという思いで始めました。そのような手軽さというのが詩集の魅力の一つだと思います。



Q8. 図書館でも昔の本は借りられますが、古書店のオーナーとして、図書館にどのような印象やイメージをお持ちでしょうか。

A. 古書店オーナーとして、図書館は切っても切れないパートナーのような関係です。本を売る場合はお客さんですが、教えてもらうこともよくあります。どちらかという博物館などの専門の図書館とのやりとりが多くて、こういう本探していますと言われてこっちも勉強するし、逆にその図書館の司書さんに知らない本をご提案することもあります。大学図書館からも学科に沿った本のご注文をいただくこともありますね。

Q9. 学生時代に図書館はどのくらい利用していましたか。大学図書館での思い出をお聞きたいです。

A. 学生時代にはお金もなかったもので、暇つぶしによく行っていました。そんな中、図書館で『エスクァイアマガジン日本版』という雑誌で、ビート・ジェネレーションの特集が組まれているのを見かけました。冒頭でポケット詩集を出版している本屋のオーナーでもある詩人の方がインタビューを受けていて、当時 1995 年頃のインターネットが家庭でも普及し始めて、浮かれている雰囲気の中で、その方の「これからはバーチャル対リアル戦争だ」と地に足をついたことを言っていたのがとてもかっこよくて、感銘を受けました。その雑誌との出会いが図書館だったので、その時に図書館に行っていなかったら、今本屋さんをやっていないかもしれないです。

だから、学生時代に図書館にたくさん行ったほうが良いと思います。何かをしにいくというよりは、目的を決めずにいくと意外な発見があります。

Q10. 古い書物や資料の保存を行う大学図書館は、古書を後世に残していくという点で古書店と通じる面があると思いますが、古書店のオーナーとして、大学図書館に求めるものはありますか。

A. 大学図書館よりは、研究室に対してよく思うことがあって、長年勤めていた先生が辞めると、研究室にあった大量の資料が、自宅には持っていけないからと、古書店業界に流れてしまうのがすごく勿体ないと思います。散逸するのを防ぐためにも、図書館には、個々の先生の蔵書という単位で保管する仕組みがあると良いと思います。アメリカの大学図書館はコレクションの保管が行き届いていて、古い本や手紙は紙が悪くならないように、体育館くらいの大きさの、室温と湿度が一定に保たれている書庫に入っています。

例えば、アメリカに禅を広めた詩人のゲーリー・スナイダーさんの手紙のリストを見たくてカルフォルニア大学の図書館に行った際に、全て手紙を見ることができ、とても勉強になった経験があります。

Q11. 渋谷近辺でおすすめの古書店はありますか。よく行くお店を伺いたいです。

A. 先月神保町にオープンした [Wols Books](#) (ヴォルスブックス) さんです。神保町の老舗の古書店にいた方がオーナーで、アートブックを専門に取り扱っています。オーナーの方が親切丁寧に教えてくださる方で、まだ知っている人が多くないと思うので、とてもおすすめです。

